

蹴球部史作成の思い出（5・3・20）

西山 嘉雄（昭15・文甲）

☆部史へのとりかかりかた

私は多少本づくりの経験があったために、昭和57年の暮れに同期の西本清光君（理甲）からの呼び出しで部史作成にかかわるハメになったのですが、蹴球部の栄ある歴史を、汚したとは言わないまでも何のプラスも加わえなかったような男が、部史作成の思い出話をするのは非常に忸怩たるものがあります。井垣君がどうしてもやっつけてほしいとのご指名でやむなくここに来た次第です。

どこの部でもそうだろうと思いますが、部史を作ろうという話はしばしば起こっては立ち消えになるらしいのですが、蹴球部も同じことを何回くり返していたようです。それが、昭和57年あたりから「みんなドンドン死んでいきよるで。生きてる者が多いうちに部史を作らんと何んにもならんやないか」という声が出てきたようで、コンパの席などで田鍋健さん（昭8・積水ハウ

ス社長）あたりが「部史を作るんや」と宣言し、「誰それが編集長や。しつかりやれ」というようなことで、みんな「そや、そや」と手をたたいたことは私も覚えていますが、それから先はどうなったのか一向に不案内でした。

ところが57年の暮れに西本君から電話があつて、部史作りの会合があるから顔を出してほしいといふのです。「そんな大任はガラではないから」と渋つたのですが「編集長はタシさんがやるからお前はその後働らきをしてくれたらいいのや」といふふうな話。タシさんというのは田代善信氏、私が三高に入つた年の卒業（昭12）で、当時は京大生、ラグビー部のコーチをしていました。この人は歴史が専門ですから、すっかり安心して、校正の手伝いぐらいをすればエエのやろ」と至つて気楽な考えでここ三高会館に参りました。

来てみると、阿部吉蔵さん（大15）がキャップ格で、三高蹴球部の歴史の大筋を諄々と話されたり、あれこれのエピソードを楽しそうに紹介されたりしていました。慶応からの始めてのラグビーボール、糺の森で第一蹴をやつて、三田グラウンドでの最初の国内チーム同志のラグビー試合としての慶応・三高戦、しばらく「うつつとうしい時代」が続いたけれども大正5年あたりから東の慶応、西の三高といわれるくらいに隆盛になり、大正年間はずっと全盛を誇り、やがて昭和4年頃からオカシクなつてきてどうのこうの——という話をされるわけです。その間には、三高の連中の勉強（イギリスの原書による）によつて、FWのエイトシステムの開発もあり、また英

国皇太子や秩父宮両殿下のご来校観戦もあり……まあ縦横無盡にお話をされるわけです。お話ですから、とびとびになってはいますが、聞いている私にすれば、お話の内容を少し体系づけて書上げれば、もう部史は出来上りとちがうのか？なんて思いました。

何回かそんな会合に出ているうちに感じましたのは、お互いの話は面白いし、みんなでワァワァ語り合って、あとで一杯やって機嫌よく別れていけば、それはそれでエエのやけれど、「部史」というからには、ひとつの本の形にまとめんといかんワケですから、文字や写真の原稿というものが必要で、その原稿をどうやって仕上げるか、どのようなものを誰にどう分担してもらって、いつまでにまとめるか、つまり本づくりの段取りをキチンと決めて進行させないと、語り合い飲み合って楽しんでいたのでは部史は「刊行」できない、ということでした。

それで、いつということなしに、私が本づくりのスケジュールの下書きをして皆の意見を出してもらおうというようなことになり、昭和58年4月に刊行要領をつくり、部史の骨組みと必要な原稿内容を示して、部員名簿によって発送しました。（以下の部史作成の進行のあらましは、お手許にお配りした部史の「おわりに」のコピーをごらん頂ければ幸いです）。

まあ、ドンドン死んでいきやるわけでもありませんが、最高令者は90才になっていますのでとにかく刊行を急いで、少しでも多くの人の黒い眼で読んでいただかねばならない。それで、ちょっと無理かとは思いましたが刊行は一年のちの昭和59年5月に予定しました（実際に刊行された

のは少し遅れて9月になりました)。本の大きさはB5(週刊誌の大きさ)、ページ数は約二〇〇(これが実際には五七〇ページにもなっていました)。経費の予定は約三〇〇万円(実際は四五七万円と大幅に超過しました)——従って部員の負担は最低一口一万円——というのが最初のプランです。問題の原稿の切りは七月末日にしましたが、これはあまり余裕のある日限にする^と却って忘れられてしまうおそれがあると考えたからです。

こんなことで、とも角一通りの体裁を整えた部史を早く刊行しようというのがいわば第一目標で、時間をかけて丹念に資料を探しそれを逐一検証して正確を期す——というような、いわば正攻法をやっている時間的ゆとりがない、またこちらの能力にも限りがあるわけです、資料集めはまず手近かにあるものから手をつけて、予定の時間内で処理できるものに限定していこう、あとで「刊行のことば」にも示されていますように「部史と称するには不十分な点の多いことは承知している。しかし、今は一日も早い刊行を優先すべき状況にあると考え、不備のところを補う機会に恵まれることを祈念しながらここに一書を成した次第である」という姿勢をとったわけです。

ここで少し横道に入りますが、あとで耳にしたことですが「部史を作るのは大賛成やが、一体誰がやるんや。そんな能のある者がわが蹴球部におるのか?」という不安から、ラグビーのことは体験もあり知識も広く、また筆も立つ、いわば専門家に頼んだほうが——東京にそいう

適任者がおられたようです——確実にいい本ができるのと違うか?」という意見があったようです。結局は三高の連中で作ろうということに落ち着いたらしいのですが、実際に部史作成をやってみて、途中でこの説にも「理はあるな」と思ったことがあります。

それは、三高の連中で作るとなると、いわば身内のものが身内の歴史を書くということになるわけで、ある問題についてコレは一体どういうコトなのか、真相はどうだったのか、といった点をつきつめて追及することがやりにくい面もあるわけです（勿論、先きに申しました時間的制約も大いにあるのですが）。まア、このへんで何となくおさめておこうか——そんなような煮え切らない態度でやりすごしてしまふ——というと何だか無責任なようでもあります。無責任というのとはまた少しちがっている「身内びいき」みたいなクライがどうしても出やすくなってしまいます。言葉は悪いですが、「身内のボロをわざわざ掘り出さんでもいいやないか」といったような気分ですね（部史の骨格を歪めることでなければ）。ただ、一度活字にして残しますと、やはりその通りに一応は信用されるということがあるわけで、そのへんのかね合いが厄介なところで、ここらあたりになりますと、部外者なら遠慮なしに真相はどうであったのかを淡々として究明していけるだろう——そんな感想を抱いたことも事実です。まア、こういうことは個人の伝記にしても社史にしても同様のことが言えるのかも知れません。

☆「事實は眞実の敵である」という言葉

部員すべてにお願いした回想記を整理して感じて感じたことの一つは、人間の記憶というものの玄妙不可思議さということです。いわゆる記憶違いというようなことはザラにあることで、例えば何年の大高戦には27―3で勝った——とご本人は書いていますが実際は21―15の接戦だったというたぐいのことは沢山ありましたが、こういうのは原文尊重の建て前で通しておいて文末に注を入れて正確なスコアを書いておけば別にどうということなしに済むことです。ところが、例えば——お名前をあげてまことに失礼かとも思いますが——大正12年にご卒業になった湯川さんの回想記にはこう書かれています。対慶応戦のことです。

「私の二年生の冬は三田綱町の慶応グラウンドへ遠征となり、今年は久しぶりに勝てると自信のあるメンバーで臨んだ。今とちがって見物人も少い狭いグラウンドで大健闘をして、もう少しで勝てるところを引分けだったが、勝てなくて、熱涙に袖をぬらした思い出がある」

ところが、慶応戦で引分けたのは大正6年に一回あるだけで、あとは全部敗けているのです。湯川さんのご在学の実績をみると大正12年の1月4日が3対13で惜敗をしているほかは大正7―11年、何れも少差ながら零敗になっています。そして大正12年の試合は前半が3―3のタイスコア、後半が0―10で合計3―13の敗け。どうやら湯川さんの頭の中には前半の熱闘ぶりが強烈に印象づけられていて、後半のことはどこか霧の中にでもかくれてしまったものようです。

整理をする側にとっては、これは厄介な問題でして、回想記という性格上、つとめて原文を尊重する（誤字・脱字などは論外として）ことにしてはおりますものの、こうハッキリと「事実と異なる」文章をそのままのせてしまうのは気になります。といって、筆者がこれほど情熱をこめて書いてこれたものを、「これは思い違いの甚だしいもの、再度よく考え直して書き改めてください」——とはどうにも言いにくい。ここらが、身内の、しかも下ッ端後輩のツライところですが、然しまた考えてみると——というのは、これは私がどこかで読んだ記憶のあるものですが、「事實は真実の敵である」という言葉、この言葉をかみしめて湯川さんの文章を見直すと、湯川さんにとっては、「引分けて熱涙に袖をぬらした」ことこそが真実の姿であって、その貴重なわば宝物を一片の冷たい数字（スコア）という事実をふりかざしてむざむざ打ちこわしてしまうのも、ことの性格上いかなるものであろうか——というような気分にも包まれてくる次第で、サテどうしたものか。結局は文末に小文字で（注）として「この部分の記述は記録と一致しない」と追記することでおさめてしまいました。「あの時は、勝てそうで引分けだった。悔やしかったなア、皆でホンマに涙流して残念がった」という想いそのものは残しておきたいなア——というのが整理する側の言わば逃げ口上ですが、身内の部史の回想記だからア許されることではないかと今も思っています。ただ、今日になってみると、あとで付けた注が何とも素ツ気ないもので、せめて「当日の記録は（3—3、0—10）で前半は同点だった」ぐらいに、もっと親切にしてお

くべきだったと反省させられています。

ところが、この種の事例と少し異って、事實は一体どうだったのかということにこだわらざるを得ない事例もあるわけで、特に部史としてはキチンと抑えておかないかんような点で事柄がどうも明確でないときに、それをどう記述すればいいのか、これにはかなり悩まされましたが結果はどうもはかばかしくはなかった感じ です。次に、その一例をお話しようと思います。

ご承知の下賀茂神社に糺の森というところがありますが、その一隅に蹴球部が創立60周年を記念して昭和44年10月5日に除幕式をした「第一蹴の地」という石碑があります（この文字は当時の同窓会長阪倉篤太郎先生の揮毫です）。この石碑の裏面には『明治四三年九月 第三高等学校生徒 堀江卯吉 中村愛助 相馬龍雄 玉置徐歩は慶応義塾塾生 直島進の指導により この地で初めて ラグビー球を蹴る こうして三高蹴球部が生まれ ここに日本ラグビー界の輝かしい歴史が始まった』という文言が刻まれているのです。

ところで、名の示された四人の三高生のうちで堀江卯吉氏（明44）はこの地の第一蹴で真島進氏の相手をしたことが慶応側の文献に照らししても確實視されるのですが、あとの三名は本当にこの第一蹴に参加していたのかどうか——となると、それを実証する人やモノが部史作成当時には見当らなくて困りました。石碑の裏に明記してあるから正確な事実には違いないだろう、なんで今さらそれを実証せなアカンのや？と言われるかも知れませんが、私が気にしたのには次のような

理由があったからです。

というのは、石碑の出来た昭和44年を遡ること8年、昭和36年12月に発行された三高同窓会報に前記三高生のうちの一人である玉置徐歩氏（大2）が蹴球部創設時の思い出話をかなり生き生きと描写されているのですが（「ラグビーの昔ばなし」）、この中にはご自分が糺の森でラグビーボールの第一蹴をしたことは全く書いておられません。こういう個人としても部としても画期的なことがらを当のご本人がその回想記で書き落とすということはなかなか考えにくいことです。

また、中村愛助氏（明44）ご自身が創部前後の事情を詳細に書き残された「母校ラグビー創設当時の思い出」（蹴球部後援会々誌・昭和12年2月20日発行）にも、糺の森での第一蹴ということが出てきません。これも不思議なことです。しかも、玉置氏は前記の「ラグビーの昔ばなし」にはこんなことも書いておられるのです。

「第三高等学校のラグビーの蹴り始めは明治四十三年九月二十三日に一中側のグラウンドで行われたものであるが、三高ラグビーの発祥地は糺の森であるとも伝えられる。これも間違いでない。堀江卯吉君は三年の一学期に下鴨の百姓家に下宿していた。慶応の真島選手が新学期帰校の途中京都で下車し、ボールを持って堀江君の部屋に泊り込み、近くの糺の森でラグビーの蹴り方を教えたものである」

こういうわけです。ご自分や中村、相馬の三名も参加して蹴り合ったものだとは明記されてい

ません。また、見方によっては、真島、堀江兩名による掛値なしの真正銘の第一蹴のことを、玉置さんは何だか他人事のように書いておられる形なんです。

そこで、私の頭の中で石碑の文言が少し揺らぎ出したわけです。事実はどうなのか？いろいろ考えてもみました。その結論としておちついた先きは、こんなことでした。

石碑に刻まれた「第一蹴」というのは、右に述べられているような、いわば歴史的事実としての正味の第一蹴を言うのではなくて、むしろ三高蹴球部の創設に中核として関与した人たち（四名の三高生は何れもそうした役割を果たした人のようです）の「創部の歌声」のようなものを象徴した、そういう意味での「第一蹴」であって、それを石碑として据えるのに、ゆかりの深い糺の森を選んだのだ——勿論これは私の推測にすぎません（もともと、こんなことを言いますと、阿部さんがよく指摘されたように「それは文学であって歴史ではない」ということになるのかも知れませんが……）

まあ、そんなことで、言ってみればここにも事実と真実、今申しましたケースでは「事実は真実の敵である」とまで言い切ることに問題もあるでしょうが、何やらそんな気配のあるところ
です。

サテ、一応のところこうした推測はできるのですが、他方で石碑の裏の文言は一体どういう経過をたどって誰がきめたものなのか——実は部史作成当時には、石碑を建てた昭和44年10月頃の

いきさつをよく知っている人が見当りませんでした。石碑除幕式のもようをその当時に記述した一文に田村哲也氏（昭19）のものがあるのですが、これには「この記念碑は唯一人の当時の生存者玉置徐歩先輩をはじめとする部員一同の悲願であった」と書かれているだけです。しかも部史作成時には田村氏も玉置氏も他界されていました。また、部史刊行会の代表者になっていただいた谷村敬介氏（大8）には作成過程で実に貴重な諸資料を拝借したり、数回入洛されて数多くのご指導をたまわったものですが、この谷村さんにも直接に、糺の森の第一蹴者はこの人たちで間違いないのですかという質問をしましたが、どうも明快なお答えは得られませんでした。

結局この部分については、四十年の歴史を総括した形の「序章」で、「ここでのキックの練習に堀江のほかに何人かの三高生がいたか否かについては確証がない。しかし、この一蹴が前述した中村愛助らの欲求を満たすキッカケとなった。堀江と中村は三部医科の同級生である。当然、次の段階としての蹴球部員集めの方策が彼らによって練られ始めた」と書くに止めました。

そんなわけですから、糺の森の石碑の裏を読まれる人はその通りに信用するでしょう。まさか蹴球部史の「序章」のくだりを読み合わせる人など到底考えられませんから、これはこれで仕方のないことでしょう。

少々筋違いの話なのですが、私自身にも「仕方ないな」と諦めていることが一つあります。それは「神陵史」の中に最後の名寮歌といわれる「沫雪ながれ」が生まれた経緯を書いたところが

ありますが（同書八七二頁）、それによりますと「沫雪ながれ」の作詞者谷長茂君（昭15）に私が作詞を頼んだことになっています。ところが私自身には全く記憶のない話なんです。私は三年の一学期（昭14）に自由寮の総代をさせられていました。これはまぎれもない歴史的事実でございます。ちょうど三高創立七十周年ということで、自由寮の前のいわゆる南グラウンドに大きなテントをいくつか張って、幣原喜重郎さんなど大先輩も大勢見えて屋外会食のようなこともあったのですが、この七十周年を記念して、久し振りに新しい寮歌を作ろうやというような話が室長連中の間からでも出ていたのかも知れません。それを私があるいは取次いだのかとも考えられますが、同じ時に総代をしていた岩崎剛君（昭15）に問い合わせてみても「そんなことがあったかなア？」と言います。作曲をした山辺武麿君は私と同じクラスでしたからこの山辺君にも確かめてみましたが、作詞をうけとって作曲をしたのは昭和15年の2月末であるのは確かだが、さて谷長君に誰が寮歌作りを頼んだのかまでは知らないという返事です。「神陵史」の筆者が、當時はこの世にいた谷長君に直接聞かれて、ああいう風に書かれているのかなアと思ったりもしますが、こちらとしては「それは違う」というハッキリとした反証が挙げられないために、そう書かれていてもまア仕方ないのかな——なんて思っている次第です。

☆「花吹雪三高生らまた歌う」

部史作成で改めて各方面の資料を集めはじめましたが、思いがけないものもありました。誰が持ってきてくれたのか今は忘れてしまつて甚だ申しわけないのですが、京大生の俳句の雑誌がありました。その中に日野重徳君（昭15・グアム島で昭19年8月戦死）の作品があつて見ていくと、

花吹雪 三高生ら また歌う（注、原文は歌ふ、だつたらうと思ひます）

というのがグッと来しました。俳句のことは全く知りませんが、三高蹴球部が消滅して三十数年経つてから、みんなで部史を作ろうとしているわれわれの気分には、この一句がひどくピッタリくるように感じられました。これは活かしたい——というので、「序章 蹴球部四十年の歩み」という扉のうらに据えました。ちょうど中西徹君（昭24）の画かれた三高正門を北から眺めたカットもあつたので、そのカットの上に置きました。これなどは当初まったく予想もしなかつたもので、本になつたあとの反響が少し気になっていたので、小西恭賢氏（大12）の弟さんが俳句に詳しい方だそうで、贈られた本をご覧になつて「この句はたいへんすぐれた句だ」と賞められたと聞いて一安心したものです。（因みに小西恭賢氏は私が神戸一中時代にラグビー部長をしておられました。私は公民科の授業をうけました。その頃は私が三高に入つてラグビーをやるなんて思つてもいませんでした）。

また、蹴球部は筆不精を以つて自負する部で（「筆まめは山岳部にでもまかせておけ」なんて

いう先輩もいました)、日誌など殆んど残っていませんが、たまたま昭和10年から13年にかけての「キャプテン日誌」が残っています、読むと大体は「集まりが遅い」とか「やる気があるのか」といったボヤキ、ときには「何某はケンからん、なぐってやりたい」なんて物騒なことが多いのですが、なかにはこんな文言もあって、三高らしいなアと思ったものです。これは昭和10年6月3日付のもので理事の田口信弘氏(昭11)が書いたものと思われます。

「三時ボックス集合。掃除する。ユニフォーム、パンツ皆持ち帰り洗濯さす。へ中略へ春の蹴球部の練習、行事は全部無事終了。夏合宿まで用事なし。皆、勉学すべし」

最後の一句が「泣かせる」感じです。

また、部史のなかに山修先生の追悼文を同窓会報から転載しましたが、ここへ、なるべくなら普段着の先生の写真がほしいなと思っていたところ、ある日偶然にも私の手もとから山修先生ご夫妻が北白川東平井町のご自宅でこやかに、しかも注文通りの和服姿で写っている小さな写真が出てきました。裏書きを見ますと、先生が京大を停年退官されて間のない頃のもので、これは二年生の時にクラス担任をして頂いた文甲一の連中が記念に置時計を贈った時のもので、その時計を前にしてのものです。思わぬ拾い物というところで、全く何が役立つか分かりません。

この写真と、昭和3年(ご大典の年)11月24日に三高校庭に來られて三高対京大一、二年生の試合をご覧になった時の秩父宮(軍籍があるのに、この時は背広にソフト)とくに妃殿下の何と

も初い初いしいご様子（たしか新婚ホヤホヤ）の写真——これは例の「宝物」の箱に入っていました——。この二つはいわば武骨者ばかりが登場するこの部史に一陣の薰風を吹きこんでくれた気分がしました。

本づくりをしていて、字数だの、写真だの寸法だの、本全体の割り付け、ページのアキをどう埋めるかなどの細々しいことに気を使っていますと、こんな他愛のないことでも元気づけになるものなのです。

☆英国皇太子の来校観戦のこと

イギリスのエドワード皇太子（この方はのちのエドワード八世、昭和11年でしたかシン普森夫人と恋におち入り王位を棒にふられた方です）が三高の校庭に來られて三高と神戸外人とのラグビー試合をごらんになったのは大正11年4月29日のことです。これは大正天皇の摂政をしておられた裕仁皇太子が前年に外遊されて英国でいろいろと歓待を受けたので、ひきかえにエドワード皇太子をご招待したのですが、東京での公式行事が終わって関西遊覧となったときのことです。非公式の遊覧中の一興というのかも知れませんが、どうして日本の高等学校の校庭に足をはこばれるようになったのか、これについてはいろんな解説があるものの、何がキメ手になったのかはどうもハッキリしないのです。ことに当時三高は校長排斥運動が起っている最中で、殿下の

ご接待は校長ならぬ平田元吉蹴球部長が当たったという、何とも三高らしい情況の中での出来事で、とても京都府庁などが間に介在していたとは思えないのです。英国皇太子来日を好機に三高でラグビーの試合を観てもらおうという発想は、時の蹴球部主将奥村竹之助氏（大12）によるものらしいのですが、のちに日本ラグビー協会会長になった香山蕃氏（大9）なども側面から工作し、三高教授エルグー氏が「英国ではロンドンの乞食でも国王に手紙を出すことができるのだ」と励ます一幕などもあって、シンガポール発の電報で皇太子台覧試合が認められたという話になっています。

日本のラグビー界にとっても空前の快挙を三高が行ったのですから、われわれも時間と精力をかけて事の経過や真相を追及するべきであった、早い話が、東京の英国大使館に向いて、あるいは出向く前に問い合わせの手紙でも出してみるぐらいのことをするべきではなかったのかと、今となつては反省しきりです。すでに「日本ラグビー史」という公式の書物に一通りの説明がされているのだからということにいわば寄りかかってしまった、そういう志の弱さみたいなものが少し情なく思われるわけです。

また、このエドワード皇太子が毛筆で署名した色紙（濃緑地に金箔を散らした一辺40cmぐらいの色紙）には一九二二年（大11）の五月五日の日付が入っています。これは京都方面の遊覧を終えて帰国（神戸から乗船）するとき京都駅頭で三高生に渡されたものという話なのですが、誰

かが要請したもののなか先方の全く自発的な思召しなのか、また誰が受取ってきたものかなどは全然分からないのです。「こんなもの、呉れはったで」というようなことで部長先生にでもお渡ししたのか、そのへんのことに向に聞の中です——少なくともわれわれ後輩に対して誰も何も説明をする者はいなかったし、事情を書きとめたものも残っていません。奇妙な話ですが、今さら尋ねようもなくて、ただ「こういう宝物がわが三高蹴球部には存在しております」というしかない。

考えてみると、三高蹴球部は大正年間の栄光の時代から、昭和4年1月4日の慶応戦0―3の惜敗を境にして一転、「ふつうの高等学校」並みに弱体化していったわけで、こういう斜陽の歴史を味わってきた人たちにとっては一高戦にだけは負けたくないというのが最大の関心事になってきて、英国皇太子にまつわる誇らし気な話などはどうでもよくなっていた、という言い過ぎでしょうが、まあ「昔の話さ」といったことになっていたのかも知れません。

これに比べますと秩父宮記念楯というのは生まれた事情もハッキリとしていますし、皆さんも参加されたかも知れない、毎年の校内文理科対抗戦の勝者に渡されていたものです。

☆「部史」への評価

部史は当初から遺族の方にも贈る予定にしていたしましたが、編集委員の努力、ことに城甲聡君

(昭19)の粘り強い探索で予想以上に多くの存在が確かめられました。このため部数が不足気味となつて例えは京一商とか大高とか古くからおつき合いのあつた向きに贈る本がなくなつてしまひ、たいへん不義理をしてしまいました。せめてもう50部余計に印刷しておけばよかつたあとで後悔したところです。

遺族の方からは「早速仏前に供えました」などと心のこもつたお便りを頂きました。部員の中には本を手にするやページをおく能わず遂に徹夜で読み通したという人、三人の息子にも是非読ませたいから別にもう三冊ほしいなどというのもありました。また友人の間からは「蹴球部史出したという話やのに本は残つてないらしいな。言うてくれたらワシらも一冊ぐらい買うたのに、なんで少し余分に刷つて同窓会員にも知らせてくれなんだのや」という恨み言も聞かされました。下手に色気を出して、欠損なんか出したら困るといふのが正直なところでしたので、一般会員に呼びかけることはテンで考えていませんでした。どうも三高同窓会員の厚い友情を見そこなつていたのかも知れず、お恥づかしいことです。

もう一つ気恥づかしかったのは、部外者から、まアお世辞二〇〇パーセントではありましようが、こんな批評も頂きました。ラグビー専門誌に『ラグビーマガジン』という月刊誌があります。その昭和60年5月号(部史刊行して半年のち)に池口康雄氏(この方は東大でラグビーをやリ、ラグビー評論家として名のある方だそうです)が批評をかねた紹介を四ページにわたつて書

いておられます。こちらとしては「刊行のことば」に述べてあるように「とりあえずここに一書を成した」と一息ついただけですが、過分な賛辞がたらねられています。何とも面映ゆいのですが、その一部を引用しておきましょう。

「昨年谷村敬介大先輩のご好意によって、完成された三高蹴球部史を手に入れることが出来た。慶応、早稲田などいままで数多くのラグビー史が刊行されているが、これほど立派な部史は見たことがない。消滅してから35年もたった昨年に、明治43年から40年間の歴史を完璧に近くえがいたまさに労作で三高の老ラグーマンのラグビーへの情熱、母校への愛情のすさまじさに深く感動した。豊富な資料、貴重な写真、手記、記録などが五五〇頁に整然とおさめられており、単にラグビー部史としての価値にとどまらず、明治・大正・昭和の三代にまたがる青春時代史的な興味深い内容がもりこまれている。しかも、この大書がスタートしてから僅かに一年半の年月に刊行されたことも著述にたずさわる私にとっては驚異に値する」

また、遺族のほか慶応や同志社その他、献本をした関係者からたくさんのお便りを頂き、これはこれでなつかしい一つの読み物でもあり、一度はガリ版にしても皆さんに配ろうかと考えたりしましたが実現しませんでした。これも少し残念に思われます。

部史を刊行してから早くも八年半がたちました。原稿を寄せられた人も次第に他界されていきます。編集をリードされた阿部さんも三高歌集を胸にだいて亡くなられたということです。今と

なつてはこうした方々のご冥福を心から祈るほかはありません。

〈この稿は平成五年三月二十日、三高会館で行なつた「蹴球部史作成の思い出」を適宜加除補正した
ものです〉

(前教育タイムス編集部長)